

世界で一番わかりやすい

東大入試英語

第1問B 段落問題の解き方

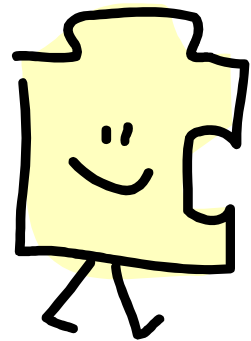
これを解いて、みんなで東大へ入ろう！

収録内容

- ① 解き方
- ② 2007 年度
- ③ 2006 年度
- ④ 2005 年度
- ⑤ 2004 年度
- ⑥ 解 答

著作者 安倍富士男 盛岡白百合学園

年 組 名 前



東大英語 第1問B 段落問題の解き方

2007/02/03 2010/04/08 改訂 安倍富士男

第1問Bとは何か？ **段落挿入問題** **制限時間は推定 20 分**
解き方は？ **東大第1問Bの解法はジグソーパズル法だ！**

どこから攻めたらよいか？

段落挿入問題の一番大事なポイント。それは「どのように英文を読んでいけば効率的か？」ということ。初学者はどこから手をつけてよいか悩んで一歩も手が出ないのではないだろうか。そして時間だけが過ぎていき、しょうがないから課題文の第2段落を読むが、なんか自信がないからそわそわして集中できない。選択肢の英文がきになるのだ。そして5分もたてば、「もうダメだ！」とサジを投げてしまうという悪循環に入る。

私たちにとって必要なアドバイスは、「どっから手をつけるか教えて欲しい。そうすれば安心して集中して100%実力を出し切れるのに。」と思っているはずだ。

それにしても赤本にはこんなに大事なことを書いてない。おかしいね。そっか、東大の入試問題は初学者は誰も解かないんだ。(笑)しかし、この解説本は初学者向けなので書いてみようと思う。

受験生の一番の関心事。それは「この問題はどこから攻めればよいのか？基になっている穴だらけの文か？それともデタラメに並んでいる挿入する英文か？」東大初学者は、まさにハムレットと同じ心境だね。To be or Not to be.(このままでよいのか、悪いのか)

答えはどちらも正解ではありません。基になっている文を読めば、段落が抜けた穴だらけとてもまともに意味が通りません。挿入すべき段落は、デタラメな語順になっているので、読んでも時間の無駄です。無駄とは言い過ぎですが、答えが見つかるまで何度も読まなければならないでしょう。制限時間も気になるし。

**もったいつけずに教えましょう。この問題の解き方は、
与えられた英文から読みます。つまり、第二段落から手をつけます。選択肢の英文は無視します。**

第二段落にだけ最大集中し、何の話かを考えながら、「不自然な名詞の使い方」を探します。そして「代名詞の使い方がおかしい」ところに鉛筆で下線を引きます。

おかしいところとは、代名詞と冠詞です。いきなり第二段落で「その村では」とか「彼女は」とあつたら、それは「使い方がおかしい」のです。その前の段落で必ず一度は出現していなければ、使ってはいけない単語です。

次にその単語を探すために、選択肢になっている段落ア～カの英文の最初の部分だけ拾い読みします。内容的に合わないものは、×です。内容的にあっていて、文法的にも OK なら、選びます。

また実際の問題文を見てもらえばわかりますが、however 等の接続詞をつかっている段落は、絶対に第1段落の候補にはなりません。そういう段落マーカーを使っていたら、読むまでもなく、チラッと確認してすぐに候補からはずしましょう。

このように第2段落を丁寧に読んで、「第2段落がこの話だから、第1段落はこういう話でないといけないはず」と論理的類推で第1段落を選びに行き、拾い読みで決定します。決定してからじっくり検算するつもり

で読み直して下さい。

それでは実際の問題で解説しましょう。

第2段落を丁寧によみます。すると内容がわかります。

内容:18世紀以来、羊やポニーの祭りはずっとこの島で行われてきたが、Pony Day の今日のような形は1924年に始まった。

とあります。

もう最初からヒントが出ていますね。いきなりこの島でと言われても困るので、前の段落では「この島」について必ず触れられていなければならない。と条件を考える訳です。考えるだけでなく、試験中はその単語に鉛筆で下線を入れておきます。

内容を読み続けます。すると、内容は、「1924年に始まったは消防団がポニーを売り、利益から消防備品を勝ったりしていた。これがこの島が有名になる最初の段階(the first step)だった。」と述べています。

なるほど！「消防団がポニーを売る島の話」なんだなあ、でも「どんな島なんだろう？」と疑問を持ちながら、第一段落探しに出かけます。

選択肢 ア

Despite their hard lives, however, the ponies are で始まるのでダメ。
however(しかし)で、物語の文頭は始まらないから。

選択肢 イ

これも同様に however で始まる段落だからダメ。

選択肢 ウ

第一文の途中までよいが、途中で these islands(こうした島々)が何の脈絡もなく出てくるのでダメ。

選択肢 エ

George Breeden で始まっているので、「おお、物語の最初としては、なんかイイカンジ」と思い少し読む。しかし、第2文ですぐに these islands(こうした島々で)とあるので、ダメ。

選択肢 オ

「毎年7月になると、世界中の人がこの島(an island)にやってくる。”Pony Day”と呼ばれる行事(an event)を目当てに。」とある。一番最初に出てくる名詞は不定冠詞で紹介するのがルールだから、これが第一段落に入るはずだ、と勘を働かせる。しかも内容面からも、「物語の場所の説明、Pony Day の内容」を述べているので、「これこそ第一段落にうってつけだ」と判断できる。

よって第一段落に入れてオを選択し、第2段落までそのまま読み続けていくこと。

第2段落まで一気に読み続ける目的は2つ。

第1段落～第2段落の「文脈の流れ」が自然かどうか、調べること。すなわち、「検算」すること。

第2段落の終わりの文をもう一度、頭にたたき込むためである。

これで一番難しい第一段落の決定が終了します。その次は、次の戦術を使って下さい。

段落選びはジグソーパズルと同じ。段落の最後には、かならず次の段落の内容と符号するサインがある。

これを覚えておいて下さい。この公式を知っているから、はっきりと間違いなく自信を持って解答できます。そうでなければ、いつまでたっても「なんとくあたった」「なんとなくはずれた」「あたってもはずれても、理由がわからない」ということになり、何回ドリルを経験しても一向にスキルがアップしません。

この公式を頼りに、これからの問題を突き進んでいくことにします。もし、この公式を使っても解けなければ、その時に初めて「なぜ間違ったのか？」を問うことができ、自分で解決することも可能になるでしょう。

(ちょっと脱線)

ところで、なぜ段落と段落は結びつきがあるのでしょうか？ジグソーパズルと同じとどうして言えるのでしょうか？ちょっとだけ解説しておきますね。

そもそも文章というのは、何らかの思想を人に伝えるためにある。そのために文章は、人に伝わるように書かなければ意味がない。文章を人に伝えるためには、修辞法(レトリック)の規則にある程度従わなければならない。レトリックには以下にあげる「三大原則」というものがあり、人は意識する、しないに関わらずこの三大原則を守って文を書いている、とされています。

レトリック三大原則

Unity(ユニティー 統一)

文章全体がある目的に向かって効果的に直接関係をもつこと。

Coherence(コヒーレンス 脈絡)

文章の各部分が整然と配列されていて前後の関係がはっきりしていること

Emphasis(エンファシス 強勢)

深い感銘を与えるために、最も大切な思想を最も顕著にする配列法であり、このうち強勢の手段として用いる言葉のあやを Figure of Speech(フィギュア オブ スピーチ 詞姿)という。

この統一と脈絡に注意しよう。文章は統一感がなければならぬし、文章を構成する段落と段落は脈絡がなければならない。では、本来別々の内容を表しているはずの段落同士なのに、どうやって脈絡をつけるか？がとても重要なこととなります。

わたし安倍が日本語小論文、英語エッセイライティングなどを研究した成果と、これまでの英文の内容を経験的にまとめると次のようになります。

段落の脈絡の付け方

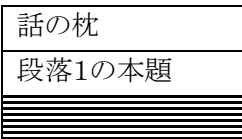
- 段落の最初の文は、前の段落の内容を受け取る文を書く。
- 段落の中頃の文は、その段落固有の内容を書く。

- 段落の最後の文は、次にくる段落を予感させる文を書く。
- 段落の内容と関係のないことは、段落内には書かない。

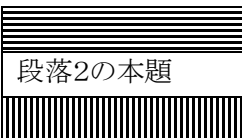
これを図解して示せば、次のようになる。

下の図で言えば、**段落の最後と次の段落の最初の文は、同じ内容になっていなければならない。**従って模様で言えば同じ模様になっていなければならないし、言葉で表現すれば「ツーと言えばカー」の関係になっていなければならない。これで段落同士ががっちり組み合うことになり、**レトリックで言う Coherence が成立している**と言えるのです。

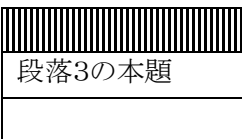
(第1段落)



(第2段落)



(第3段落)



もっとわかりやすく言えば、**段落同士はジグソーパズルのように、がっちり組み合うようになっている。**



そう、「**段落はジグソーパズル**」なのだ！

(「私の恋もジグソーパズル」なんてオヤジギャクを言っていないで、先に進もう)

それでは、問題文を使って、この公式を当てはめてみよう。

(第2段落)

第2段落の最後の文は「ボランティア消防団の Pony Day は、おどろくべきことに、この2つの島を世界地図に載せる方向への最初の一步だったのです。」である。

よって、「へえー、じゃあ、有名になった第2ステップは何なの？」あるいは「有名になった他の要因はなんだろう？」という選択の基準を心に持ちながら、適切な選択肢探しの旅にでかけることが肝心。なんの手がかりもなくやみくもに英文を探しても絶対に見つからない。結局、見えない人には見えないし、見える人には手がかりが北極星のようにはっきりと見える。

この場合も、やっぱりアから順序に見ていくことにする。すぐにイの中にぼっち呼応するように第一文の書き出しが見える。

(第3段落)

イは第一文が「しかし、本当の名声は1947年のシンコティーフグの霧という子供向け本の出版であった。」ではじまる。これでジグソーパズルの凸と凹の部分があまく合致する。そう「有名になった第1歩→有名になった第2歩」と組み合っている。

あとはこの段落を素直に読んでいく。そして最後の文に注目する。最後の文は次のように書いてある。「シンコティーフグ島は現在では多くの観光客を引きつけているが、その良さは、実は静けさ、流行遅れ、不便さなどである。そしてこれこそまさに長年、島を無名のままにしてきた特性そのものなのだ。」

(第4段落)

第1文は次の文で始まる。

第4段落 最初の文

「Pony Day が世界的に有名になる前には、この2つの島はほとんど誰にも、それはアメリカ本国でさえ同様であるが、知られていなかった」

ここでもジグソーパズルが面白いように組み合わせることができる。そう、前段落の最後の文と、次段落の最初の文のキーワードは「島の良さ(=静けさ、流行遅れ、不便さ)によって無名だった。→アメリカ人でさえほとんどしらなかった。」という共通の概念「無名性」にある。

段落の内容はしっかり読むこと。そして第4段落の最後の文に着目しよう。それが第5段落を探す手がかり、しかも唯一の手がかりなのだから。するとこう書いてある。

第4段落最後の文

「ポニーはその島にずっと住んでいた。消防団やお祭りや観光が始まるずっと前からそこにいた。そしてこのポニー達の物語(stories)こそが、最も観光客を引きつけていることなのである」

「島のポニーたちの物語」なんと素敵なキャッチコピー。なんとも思わせぶりではありませんか。次の段落を読みたくなりますね。ところで、どうして読みたくなるのだろう？ そう、「島のポニーはどこから来たのだろう？」と誰でも思うからです。その基準を心にしっかりたてて文探しの旅に出かけよう。

またアから確認を始めます。

アは、「厳しい生活にもかかわらず、ポニーは米国中西部の野生馬のように痩せたり見栄えが悪くなったりしていない。」と、「なぜ島に来たのか」「最初の2頭はどうやって流れ着いたのか」というテーマとは関係がない。しかも、陳述が現在形であるので、過去の由来についてはない。よってダメ。

イはもう選択済みだから除外。そう除外したものには鉛筆でしっかり○をつけておこう。

ウはどうだろう。出だしは次の文で始まる。

「この島のような沢山の場所では、かつては強力な原住民の言葉や歴史が十分にあったのだが、現在では昔からの名前ぐらいしか残っていないというのはアメリカの歴史の残酷な事実である」とあるので、ポニーの歴史とは直接に関係なし。

しかし、正直に告白すれば、わたし安倍は、「アメリカの歴史の残酷な事実」という言葉に誘われて、ポニーの由来になにか関係があるのではないかと思って、段落全部を読んでしまった。正確には、だいたい真ん中まで来たところで、「ちがう」と気がついたのであるが、せっかく読んだのだから時間を節約する意味でも、最後まで読み通して、「シンコティーフグ島とアサンティーフグ島の島名のいわれ」というメモを残した。

こうやっておけば、たとえ選ぶできでない段落を読んでも、あとで役に立つ。そう転んでもタダでは起きないのだ。時間は有限だから。

エはどうだろう。

第一文が「ジョージ・ブリーデンはシンコティーフグ島でおみやげ屋を営んでいる」で始まりしているので、ジグソーパズルがはまらない。これではジグソーパズルのでっぱりが欠けそうである。(笑)

オはすでに使ったから、見ないことにする。

カはどうだろう？

第1文は、「その魅力の一部は馬の起源の謎にある。つまりポニーがこの2つの島に何百年も住んでいるのにもかかわらず、ポニーがこの島にどうやって来たのかは不明なのだ。」とある。

やった！ ついに見つけた。そう、心の中のジグソーパズル「ポニーはどこから来たのか？」と「ポニーがどうやってきたのかは実は誰にもわからない」が完全に呼応する。

第5段落にはカが入る。

(第5段落)

第5段落は「ポニーが島にどうやってきたかについての伝承について」である。そして、我々の最大の関心事である最後の文に進もう。すると次のように書いてある。

第5段落最後の文「No less interesting is their biology. ポニーの生態もまたそれに劣らず面白いのである」ん～。この文章の著者はなかなか優れた書き手でありますね。また続けて読みたくなっただしょう？ そう、「ポニーの生態ってどんなんだろう？」と思われさせてくれますね。

(第6段落)

第6段は所与の文ですから、チェックだけにします。

第6段の最初の文はこうです。「何百年にもわたるこの厳しい生活環境こそが、『シンコティーフグポニー』を作り出しのだ。もともとそれは、馬だったのだ。」

バッチリです。あまりにもバッチリです。もう試験中でもバッチグー！と叫びたくなります。そう、この場合のジグソーパズルの出っ張りと同みの呼応関係は、「ポニーの生態はどんなもの？→ポニーはこの島の厳しい生活環境が生み出した」と成立しています。ここでの段落をつなぐ接着剤はズバリ「ポニーの進化」ですね。

では、第7段を探すために、第6段の最後の文に注目して、心に焼き付けます。

第6段の最後の文「しかし、島では天候と虫の害が厳しいことと、食べ物が海岸の草だけだったので、文字通り環境によって小型化が進められたのだ」とあります。

では、第7段探しに行きます。その前にここでちょっとアドバイス。**このような作業は必ずメモを残しておきます**。メモを残す利点は2つあります。1つは、選択肢探しは時間がかかるので、行きつ戻りつ英文を見ている受験者に「何がキーワードだったか」を忘れるの防ぐため。

2つ目は、人間誰しも間違いがあります。この問題の最後の方まで来て、重複する段落を選んでしまったとします。メモを残しておけば、メモの通りに考え直すか、メモそれ自体がまちがっていたかを瞬時にチェックすることができます。メモがなければ、また段落全体を読みなおさなければなりません。この問題に限ったことではありませんが、普段から手を使って考える習慣をつけておきましょう。

もう一度、「島での天候、虫、食べ物が海岸の草だけだったので、小型化した」を頭に焼き付けて、選択肢を探しに行きましょう。もう残っている選択肢はアウエの3つしかありません。しかも、さっき読み違えでウは「シンコティエグ島のいわれ」とメモが残っていますから、ウはダメです。

すると、アとエしかありません。センター試験の第3問Cもですが、この手の段落問題は最初苦労しますが、選択肢がどんどん減ってきて、後になるに従って加速度的に問題が解けていきます。これの時点では一種の「解く快感」を味わうことができます。

またアから見ていきます。

第1文は「しかし、この厳しい生活にもかかわらず、ポニーは痩せて見栄えが悪くなるということはない。逆に、塩気のある海岸の草や湿地の植物、海藻を主食として食べているため、ポニーは普通の馬よりも水を飲んでることになる。このおけがでぽっちゃり型の体型と美しい体型を保つことができるのだ」です。

バッチリです。またまたバッチリです。第7段最後文と第8段最初文の美しい連携プレーをここに見ることができます。そうです。ここでの論理は「海岸の草を食べ小型化した。→だが、この厳しい生活にもかかわらず」と流れるような送球を見ることができます。さらに、「食べ物は海岸の草や海藻」という同じ言葉も見ることができます。

(第7段落)

第7段落はアと決まりました。ここで解答を終了して、次の問題へ行ってもいいでしょう。しかし、念には念を入れて検算をする粘りと根性が必要です。ここまで苦労して解いたのですから、もうちょっと頑張りましょう。「段落挿入はジグソーパズルだ！最後と最初は呼応する！」がここまで完璧に有効だったのですから、もう少しだけがんばりましょう。

第7段落の最後は次のように締めくくっています。

第7段落最後の文「この小型化、知性、外見のかわいらしさこそが、この島のポニーを子供にとっての素敵なペットにしているのである」とある。

「子供のペット」が新しいキーワードです。さて、この新しい変化球をキャッチャーである段落は第1文でがちり拾ってくれるのでしょうか？それとも「新しい変化球なんて、とれねーよ。ケツ」と嫌われてしまうのでしょうか？

(第8段落)

第8段落は所与の段落です。さっそく第1文を見て確認に入りましょう。

第1文「世界中のあらゆる場所から何千人もの観光客がこの祭りに参加し、ポニーを売ったりする。特に子供を持つ親にとって、(参加と売買は)決して難しいことではない。」とあります。さらに、この後続の文は「子供はすてきなポニーを探しにこの祭りに参加し、大人はこの島の簡素な生活に親しむためにやってくる」とあります。

またまたバッチリです。**私のアドバイス「段落はジグソーパズルだ！最後と最初は呼応する！」は最後まで有効でした**。ここでの呼応は「ポニーは子供に最適のペット→祭りには子供連れの親の参加も多い」です。

さて、最後の仕事があります。東大の問題は2つの不要な段落を仕込んであります。それが「本当に段落として内容的に合わない」ことを確かめて長い探求の旅を終わりにしましょう。

ウ この段落のテーマは「2つの島の島名の由来」でした。関係がありませんね。

エ ジョージ・ブリーデンという土産物の主人が出てきて次のように言っています。「オレはここで生まれて80年になるが、なんでも先祖はオレが生まれる何百年も前にこの島に来たらしい。最初にこの島に入植したのは犯罪人だと言う奴もいるけど、そんなこと、うちの家系には関係ないね。第一、どこに証拠があるってんだ？」そしてそれに続いて「(中略) 彼らは自分の家系にとっても誇りを感じていますが、彼らが本当に興味があるのは、お金だという評論家もいます。」

なんとも味気ない、嫌みな内容の段落が用意されていました。ありがとう東大(笑)。簡単に見破ることができますね。まったく問題文の趣旨と合いません。

「問題文の趣旨＝この小さな島の不思議・魅力・ポニーの歴史・現在でもにぎわうポニー祭り・童話でも有名になった島・シンプルな生活が似合う島」という好意的な紹介の仕方と「この島の最初の住人は犯罪人だと言う人もいるが、どこに証拠があるんだ？」というヤクザな内容の文では矛盾します。

えっ？矛盾するってことが飲み込めない？じゃあ、教えてあげますね。こういう文章が似合う段落というのは、次のような構成です。

(前段落)

この島は、現在ポニー祭りで賑わっていますが、実は様々な血塗られた歴史に彩られています。例えば、島の入り口には、ドクロのトーテムポールが飾ってありますが、これはいったい何を物勝ちしているのでしょうか？

島はサトウキビ畑栽培のために開発されたという話が伝わっていますが、それは表の物語で、実は島の人があまり語りたがらない裏の歴史があるのです。

(エの段落が続く。ジョージが登場する。ヤクザな発言をする。)

(後段落)

このように島の人はいまや完全に観光に飲み込まれています。昔の自然も破壊され、もはや、この島に未来はないでしょう。

納得してくれましたか？笑ってもらえれば幸いです。作った甲斐があるというものです。笑うということは「なる

ほど」と思った感情の裏返しです。

解説は以上で終了します。最後まで、この東大第1問Bの解法を読んでくれてありがとう。

Thank you, everybody!

まとめ

東大 第1問B 段落挿入問題の解法

- 1 落ち着いて所与の段落(第2段落)を注意深く読む
- 2 第1段落を選びに行く(決定方針は、内容と代名詞の前後関係)
- 3 第3段落を選びに行く(決定方針は、「段落はジグソーパズルだ！前段落の最後文と次段落の最初文は呼応する！」)

最後の戦略は安倍オリジナルです。誰も書いていません。忘れないように激しくシャウトして頂ければ幸いです。

以上

2007/02/04 22:10 最終稿 安倍富士男(盛岡白百合学園)

2010/04/08 編集改訂

Far away from the beautiful lawns of New Delhi lies West Delhi's Swaran Park Industrial Area. Plastic is everywhere in the park: it covers the ground, blows in the wind, and is sorted, melted, and cut into pieces. Heavy trucks drive in and out, transporting huge sacks that are loaded and unloaded by strong men, while other men make complex deals in a specialised language that outsiders cannot understand.

Swaran Park is Asia's biggest market for plastic recycling. On four square kilometres of land, there are hundreds of small open-air warehouses piled high with plastic. Business runs round the clock, with plastic being purchased from small traders and passed on to the many recycling mills.

In India, waste collection, recycling, and disposal are conducted by government agencies, informal groups, and private companies. Until recently, only government agencies were supposed to collect, recycle, and dispose of all solid waste, but they are often inefficient. One result is that in Delhi, for example, almost all recycling has been handled informally --- as at Swaran Park --- by groups without official recognition. But now waste management is being transferred to regular private companies, and the jobs of the informal workers may be in danger.

(ア) The waste management process involves, first, collection from streets, houses, offices, and factories; second, sorting, during which materials are separated; and finally, recycling itself. In Delhi, (イ) waste collection has traditionally been carried out by an informal network of *pheriwallahs*, *binnewallahs*, *khattewallahs*, and *thiawallahs*. (ウ) *Pheriwallahs* are often seen around the city carrying large plastic sacks. Their job is to search the streets for usable *maal*. *Maal* is anything that is of some value, whether paper, plastic, glass, or metal. *Binnewallahs* pick *maal* only from city bins in specific areas, while *khattewallahs* collect only office waste. *Thiawallahs* buy *maal* from offices or households, and they can usually charge higher prices for their material, as it is of much higher quality. (エ) After the waste has been collected, it is sorted into more than 40 categories. (オ) The sorting process in effect makes the waste more valuable and easier to recycle.

(a) This informal economy, with its recycling-based business model, seems to be doing the city a great service. (b) However, informal waste collection is probably not even legal, and there is almost no government recognition for the service. (c) Some informal workers feel that stronger government recognition of the industry would result in an increase in their low daily wages. (d) At present, an average *pheriwallah* makes about 70 rupees, or about 180 yen, a day. (e) Those supporting government recognition also hope that it would improve their working conditions, which can be dirty and dangerous.

Government recognition, however, would bring its own challenges. A major reason for the success of this informal industry has been its low cost of production and its flexible standards --- a flexibility that would be lost if government regulations came into effect. Government recognition is also unlikely to benefit those who most need protection, as licensing might merely create a privileged group that would make large amounts of money just because of their licences.

- (1) 以下の文は,第四段落のア~オのどの位置に補うのが最も適切か。その記号を記せ。
Each category has a specific task.
- (2) 第五段落の文(a)~(e)のうち,取り除いても大意に影響を与えないものはどれか。その文の記号を記せ。
- (3) 上の文章の末尾には,次の四段落が入る。その最も適切な順番をア~エから選び,その記号を記せ。
- (i) Another source of conflict comes from new regulations which require that all urban waste be sorted according to complex rules. These rules are difficult for the informal processors to follow, so many neighbourhoods are handing over waste collection and separation to private waste management companies.
- (ii) In the case of waste collection, private waste companies in Delhi are paid on a weight basis. This puts the private companies in direct conflict with the existing informal system, as one kilogram of waste collected by the informal collectors is one less kilogram for which the private companies would otherwise be paid.
- (iii) If big business becomes even more involved in waste management, the present informal economy will be at risk. Soon private companies could be building sorting stations, warehouses, and finally recycling factories. Eventually they might drive the informal collectors, transporters, and traders out of business, and the huge recycling system of Swaran Park --- a unique and colourful part of Delhi life --- would no longer exist.
- (iv) Something like that happened as a result of the Supreme Court ruling in 2000 to close all polluting industries in Delhi. The decision caused a number of factories to move to the neighbouring state of Haryana. But the transfer of any material across the state border was impossible without a trader's licence. Few possessed this, resulting in the rise of dealers who make huge profits simply by carrying raw materials across the border.

ア (i)---(iii)---(ii)---(iv) イ (ii)---(iv)---(iii)---(i) ウ (iii)---(i)---(iv)---(ii) エ (iv)---(ii)---(i)---(iii)

- (4) この文章の表題として,最も適切なものを次のうちから選び,その記号を記せ。

- ア Informal Workers Find New Careers
 イ The Importance of Recycling in India
 ウ The Worsening Pollution of Swaran Park
 エ Competing Systems of Waste Management
 オ West Delhi Resists Government Regulation

2006年 東大 第1問B

1 (B) 次の英文はアメリカのある行事について述べたものであるが、一つおきに段落が抜けている。空所 1~4 を埋めるのに最も適切な段落を、以下のア~カよりそれぞれ一つ選んでその記号を記せ。ただし不要な選択肢が二つ含まれている。

1

Although sheep and pony festivals had been held on the islands since the early eighteenth century as part of the regular control of animals, today's version of Pony Day began in 1924. At that time, the Volunteer Fire Department on Chincoteague began selling ponies during the annual festival to raise money for fire-fighting equipment. By selling ponies each year, the Fire Department has been able to support its operations and maintain the population of ponies at a suitable size for the balance of nature on the island. The Volunteer Fire Department's Pony Day was, surprisingly, just the first step in the direction of putting two tiny islands on the world map.

2

Before Pony Day became an international tourist attraction, very few people, even in the United States, knew these islands by name. After all, Chincoteague and Assateague are tiny islands where there used to be more wild birds and ponies than people. For centuries, the ponies lived mostly free of human contact; gradual human settlement on Chincoteague, however, resulted in their being only on Assateague where even today no people live. The ponies had been on the islands long before such things as Volunteer Fire Departments, carnivals, or tourism existed there, and their story is the one that continues to draw the most visitors.

3

It was difficult environmental conditions and isolation over centuries that created the "Chincoteague pony," which was originally a horse. Indeed, if taken off the islands while young and raised with standard food and shelter, the ponies are known sometimes to grow to horse size, taller than fifty-eight inches. Yet, on the islands, where the weather and insects are severe, and their food mostly tough beach grasses, these horses have been quite literally downsized by their environment.

4

Thousands of visitors from all parts of the globe attend the festival, and selling the ponies, especially to families with children, is far from difficult. Children come to the festival trying to find ponies that look like Misty, and adults come to learn about simple island life and the history of Chincoteague and Assateague. It is a fact of modern times that global tourism is the best way to preserve local customs; without their popularity with huge crowds of tourists each summer, it is likely that the wild ponies would not be allowed to survive. Although Pony Day has become necessary to the local economy, the fishermen and residents of Chincoteague as well as the ponies must be relieved to return to their quiet lives after Pony Day is over. The tourists, on the other hand, return to their busy modern lives from brief summer vacations, refreshed somehow by the sight of wild ponies swimming to freedom.

ア Despite their hard lives, however, the ponies are not thin or ugly like so many wild mustangs in the American West; on the contrary, because they eat mostly salty sea grasses, wetland plants, and seaweed, the ponies drink a lot more water than average horses, which gives them a "fat" and healthy appearance. Once under human control, they are known to become gentle animals, too. Indeed, it is just their small size, intelligence, and good looks that have made these ponies such desirable pets for children.

イ Fame truly came, however, with the 1947 publication of *Misty of Chincoteague*, a best-selling children's book translated into languages all over the world. In this story, author Marguerite Henry describes not only how the Beebe family adopted a clever little Chincoteague pony named Misty, but also the island people's customs and lifestyles seemingly untouched by the mad rush of modern life in cities. The qualities of small island life that today's tourists find so appealing in Chincoteague – quiet, old-fashioned, and not at all convenient – are the very same qualities that kept these islands unknown to so many for so long.

ウ It is a cruel fact of American history that many such places as these islands, rich in the language and history of what was once a strong Native American presence, now have only their native names remaining. Chincoteague and Assateague, in fact, were first named by a group of Native Americans called the Gingo-Teague. "Chincoteague," for example, is said to mean "beautiful land across the water." English settlers kept these names when they began to come to the islands, long after Native Americans had been forced out of the area altogether or onto lands where only Native Americans could live, called "reservations."

エ George Breeden runs a local gift store on Chincoteague. "I have lived here for almost eighty years now, and my people came to these islands centuries before I was born," says Breeden. "Some folks say that the first settlers sent here from the colonies were criminals, but I do not believe that was the case with my family. Where is the evidence?" Breeden and other island residents have organized an official list of the first families of Chincoteague. These families are proud of their long history on the island, but critics claim that they are more interested in making money on tourism today than in learning about the real history of times past.

オ Every July, people from all over the world gather on an island off the mid-Atlantic coast of the United States for an event called "Pony Day": a carnival where the only remaining wild ponies east of the Rocky Mountains lose their freedom for a day. The ponies swim and splash, as people cheer and "water cowboys" guide them across a narrow channel of water separating two small islands named Chincoteague and Assateague. A mere five minutes later, the ponies reach land. Once on Chincoteague, the ponies receive health inspections and some are sold. The next day, the ponies swim back home to freedom on Assateague, marking the end of a local festival known around the world.

カ Part of that appeal is the mystery of their origins; while the ponies have been on Chincoteague and Assateague for hundreds of years, how they got there is unknown. One tale has it that when a sixteenth-century Spanish ship sank nearby during a fierce storm, only the horses survived by swimming to safety. Another legend claims that Spanish pirates hid their precious horses on these lonely islands. However, most historians insist that early settlers in the Virginia and Maryland colonies brought the horses from England, and later kept them on the remote islands to avoid taxes on animals. No matter which story one believes, however, the legends of the wild ponies' origins are rich with facts and fiction. No less interesting is their biology.

2005年 東大 第1問B

次の英文はエスペラントについて述べたものであるが、一つおきに段落が抜けている。空所1～4を埋めるのに最も適切な段落を、ア～カ(4～6ページ)よりそれぞれ一つ選んでその記号を記せ。ただし不要な選択肢が二つ含まれている。

Bialystok in the 1860s was a city torn apart by intolerance and fear. Located in the north-east of what is now Poland, and at the time under Russian rule, the city was home to four main communities: the Poles, the Russians, the Germans, and the Jews. These communities lived separately, had no shared language, and mistrusted each other deeply. Violence was an everyday event.

1

Zamenhof had been brought up by his parents to speak Polish, German, Russian, Yiddish, and Hebrew, and he also had a good knowledge of English and French, so he knew that no existing language would work. For one thing, the fact that all of these languages were associated with a particular country, race, or culture meant that they lacked the neutrality any international language would need in order to be accepted.

2

But inventing languages doesn't pay the bills, so Zamenhof needed a career. He studied medicine and became an eye doctor. By day he took care of people's eyes, and in the evenings he worked on his new language: Esperanto. Esperanto is a beautifully simple language with only 16 basic rules and not a single exception. It is probably the only language in the world to have no irregular verbs (French has more than 2,000, Spanish and German about 700 each) and, with just six verb endings to master, it is estimated that most beginners can begin speaking it after an hour.

3

Although Zamenhof's beautiful language is not associated with any one nation or culture, three-quarters of its root words have been taken from Latin, Greek, and modern European languages. The advantage to this is that about half the world's population is already familiar with much of the vocabulary. For an English speaker, Esperanto is reckoned to be 5 times as easy to learn as Spanish or French, 10 times as easy as Russian, and 20 times as easy as Arabic or Chinese.

4

ア At the same time, Johann Schleyer, a German minister, was working on his own new language, Volapuk, meaning "World Speech." Schleyer's language first appeared in Germany in 1878, and by 1890 more than 283 Volapuk-speaking associations had been formed. But generally, people found Schleyer's language strange and ugly — and no easier to learn than Latin.

イ These existing languages also had complicated grammatical rules, each rule with its own exceptions, and this meant that they lacked another essential characteristic of a universal second language: they could not be easily learned by ordinary people. The difficulty factor also meant that neither Latin nor classical Greek had much potential as a universal language. Zamenhof was left with only one option: he would have to devise his own.

ウ It was here, where lack of understanding created racial hatred, and racial hatred regularly exploded on the streets, that Ludovic Zamenhof was born in 1859. His mother was a language teacher and his father was also a student of languages. By the time he was fifteen, young Ludovic had seen enough violence in his hometown to convince him of the need for a common language that would enable different communities to understand each other.

エ The disadvantage, obviously, is that speakers of non-European languages have to work a little harder to get started with Esperanto. But Esperantists argue that the simplicity of Zamenhof's language scheme quickly makes up for any unfamiliarity with its root words. They proudly point to the popularity of Esperanto in Hungary, Finland, Japan, China, and Vietnam as the proof of Zamenhof's achievement in creating a global language for mutual communication and understanding.

オ Esperanto vocabulary is also very simple. Instead of creating a huge list of words to learn, Zamenhof invented a system of very basic root words and simple ways to change their meanings. Putting "mal-" at the start of an Esperanto word, for example, changes that word into its opposite. Esperanto speakers easily make new words by putting two or more existing words together. This kind of word invention is regarded by Esperantists as a creative process which adds to the appeal of the language.

カ The fact that Esperanto is so easy to learn has been the key to its success. Of course, English is even more important as a world language today than it was when Ludovic Zamenhof was alive. But while English may have become even more useful, it hasn't become any easier—and that's why Esperanto is still so popular. Whatever your native language, you start from the beginning with Esperanto. Not even speakers of European languages have an advantage. Truly, Esperanto is a language that offers everybody, equally, the chance to speak up and be heard in today's world.

2004年 東大 第1問B

1(B) 次の英文はマダガスカルの開発と環境保全について述べたものであるが、1 つおきに段落が抜けている。空所1～4を埋めるのに最も適切な段落を、ア～オ(5～6 ページ)よりそれぞれ1 つ選んでその記号を記せ。ただし不要な選択肢が1 つ含まれている。

About the same size as France, or a bit larger than California, the tropical island of Madagascar has one of the most interesting and important collections of plant and animal life in the world today. But although Madagascar's ecological system is unique, the dangers it faces are not. Like many of the world's other valuably wild places, Madagascar today has a big problem with people.

1

In the relatively short time that people have been living on Madagascar, however, they have managed to cause serious damage to its biological system. In traditional Madagascar farming, the farmer cuts down and burns a part of the forest and then plants rice on the cleared land. After harvesting the rice, the farmer leaves the land alone again for up to twenty years in order to give the forest enough time to grow back. But if farmers return to the same area of land too soon, the soils become exhausted. Eventually this leads to large areas of forest becoming transformed into wastelands, upon which nothing can grow.

2

This is a difficult balance to achieve. Although much of the destruction has been caused by individual farmers, the causes of Madagascar's environmental problems are deeply rooted in the island's social conditions and history. Madagascar is one of the world's poorest nations, with an average individual income of less than \$ 250 per year. About 80 percent of the population are farmers who depend almost entirely on the land to support their way of life. Many farmers continue to practice traditional cut-and-burn agriculture because they know no other way, and have no other means to survive.

3

The key point has been to emphasize a combination of wildlife protection and local development. The idea is to make sure that local people living near the new parks benefit from them, so that they become active participants in the program. For example, if the parks attract tourists from abroad and bring economic benefits to a region, then local people will support the establishment of parks in areas that they would otherwise have been able to farm. Park projects are also now helping local people to grow rainforest butterflies and sell them to butterfly zoos around the world, while tourism in the park is also bringing many benefits to local communities.

4

ア Historically, the absence of a human population was one of the main reasons for the development of the island's unique ecological system. Madagascar's ecosystem was able to establish itself, in other words, not only because of the island's relatively large size, geographical isolation, and tropical location, but also because it was only about 2, 000 years ago that a human population began to disturb the natural environment.

イ Plants which once grew only in Madagascar are now being commercially grown in various regions worldwide, including the southern parts of the United States. The pink and white flowers of the Madagascar Rosy Periwinkle, for example, are grown for use in some highly effective medical treatments. Medicines made from the flowers are used to treat many serious conditions, including childhood cancers, high blood pressure, and high blood sugar levels.

ウ Understanding that any program of wildlife protection would also have to pay attention to the needs and traditional way of life of the local population, the Madagascar government has developed a program called the National Environmental Action Plan. This plan is designed to break the cycle of environmental destruction, reduce poverty, develop management plans for natural resources, and protect biological variety. At the center of the plan is the creation of a system of national parks.

エ Much of Madagascar has already been destroyed by the gradual action of small farmers. Human populations have grown beyond the point at which these activities can be practiced without permanent destruction. As the forest is destroyed, so is the home for Madagascar's unique plant and animal species. Today, only 10 percent of Madagascar's original forests remain. The biggest problem facing Madagascar is the question of how to meet the needs of its human population while managing to protect its environment.

オ Since Madagascar's Environmental Action Plan was first established in the 1980s, the government has created eight new protected areas totaling 6, 809 square kilometers. Madagascar today is proud of its efforts to develop a realistic approach to "parks for wildlife and for people." A most encouraging beginning has been made in making sure that the parks will remain protected far into the future, to provide homes for Madagascar's wonderful variety of plant, bird, and animal life, and resources for Madagascar's people.

2007年 東京大学 第1問B

- (1) ウ (2) d (3) エ (4) エ

2006年 東京大学 第1問B

- (1) オ (2) イ (3) カ (4) ア

2005年 東京大学 第1問B

- (1) ウ (2) イ (3) オ (4) エ

2004年 東京大学 第1問B

- (1) ア (2) エ (3) ウ (4) オ